2020 年 10 月

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

教区だより

特別号

Vol.6

「今、この時に、親鸞聖人に遇う」

「生死無常（しょうじむじょう）を生きる智慧」

九州教区田川組正應寺　津垣（つがき） 慶哉（よしや） 氏

◎『教区だより』特別号　について

　新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、『教区だより』は通常の編集体制が取れなくなったため、５月より京都教務所の編集責任により、「特別号」を発行しております。

　通常の体制に戻るまでの間、引き続き特別号というかたちで発行してまいりますので、教区の皆様には、ご理解いただきますようお願いいたします。

『教区だより』特別号の発行について

新型コロナウイルスの猛威が世界中を不安に陥れ、私たちの日本社会も計り知れない不安の只中にあります。

これまで「当たり前」にしていたことが当たり前ではなくなった現実に直面し、あらためて考えさせられること、気づかされることも多々あるのではないかと思います。

私たちが当たり前にしてきた「日常」とは、実はどこにも約束されていない奇跡の連続であり、また人間の自我分別が思い描く理想は、常に事実の前に屈服せざるを得ないという道理も教えられます。

いま、私たちは早期の事態終息を深く願いながらも、このような時だからこそ、浄土真実を宗とする宗祖親鸞聖人の教えに身をさらし、聖人の教えに出遇い直していくことが大切ではないかと思います。

このような願いから、京都教務所では「今、この時に、親鸞聖人に遇う」というテーマのもと、『教区だより』特別号を発行してまいります。

京都教区教化委員長　日野　隆文

「今、この時に、親鸞聖人に遇う」

「生死無常を生きる智慧」

九州教区田川組正應寺住職　津垣慶哉

新型コロナウイルス感染症の影響

原稿を書き始めた今、ちょうどお盆の時期を迎えています。九州地方ではお盆の行事は宗派を超えて盛んですが、私が住職を勤めるお寺では今夏はやむなくお盆法要を中止することになりました。法要だけでなく、葬儀、ご法事、定例同朋会、さまざまなお寺の行事も、地域の行事も、宗派の行事も縮小あるいは止まったままです。学校や会社やお店、さまざまな職種も大きな影響を受けています。長期化するに及んで生活が立ちいかないという深刻な状況もじわじわと伝わってきます。新型コロナウイルス感染症の影響です。

この病気が深刻なのは、無症状の感染者が多数いるとのことで決して他人事とはいえないこと、そして感染拡大がいつまで続くかわからないことにあります。しかしより本質的な問題は、感染した人を責めたり病に対して偏見を持つことが苦しみに更なる追い打ちをかけていることではないでしょうか。

私の住む町では長らくの間感染者ゼロの状態が続きました。そんな中で口々にささやかれていたのは「一番になるのは怖いよね」ということでした。この怖さとは罹患する怖れだけでなく感染者に向けられる眼差しに対する怖れを共有しているからでしょう。それが同じ感染症でもインフルエンザ等とは異なる点だと思います。何気ない世間話の中でもネット情報でも色んな噂話が広がっていることを知っているからです。それは悪意ばかりでなく感染から身を護るための善意もあります。そこにデマ情報も含まれ、結果的には病に対する怖れを増幅し大きな不安を醸し出しているように思います。

飢饉の中での親鸞の様子

感染症の歴史を繙いてゆくと生物の出現とその進化の歴史と共にあるといわれます。感染症にいかに対処するかというところに医療や科学も発展し、社会にも大きな影響を及ぼしてきたということでしょう。では人間はどうなのか。

今から約八〇〇年前の親鸞の時代、今起こっている感染症は当時疫病といわれていました。自然災害等によって飢饉が起こるとそれに伴って疫病が蔓延し、人々が死の恐怖に襲われます。親鸞はその生涯において数度にわたって飢饉を経験しています。親鸞の妻で

ある恵信尼が娘の覚信尼に宛てて書いた手紙の中に飢饉の中での親鸞の様子が描かれています。現代語訳でその要旨を述べます。

寛喜三年四月十四日、親鸞は風邪心地で床に臥し、危険な状態です。…四日目の明け方、苦しい中にも「まはさてあらん（ああそういうことか）」とおっしゃるので「何かありましたか、うわ言ですか」と申しますと、「うわ言でない、臥して二日目より『大経』を休むひまなく読んでいる。…念仏の信心より他にどんなことに思いを馳せなければならないのかと考えて、よくよく思案してみると、十七、八年前にもっともらしく三部経を千部読んで、世の人の救いのために尽くそうとしていたが、…仏の御名（南無阿弥陀仏）の他に何の不足があってひたすら経を読もうとするのかと思い返して断念したけれども、なおも少しその気持ちの残りがあったのだろう。人の執着心、自力の信心はよくよく気をつけなければならない、と心に決めてから後は経を読むことはやめてしまった。こうして臥せって四日目に「まはさてあらん」と申したのだ。」（参照　聖典六一九頁）

この中にある寛喜三年、親鸞五十九歳の時も、十七、八年前のその時もいずれも飢饉の最中で疫病が蔓延した状況の中でのできごとです。親鸞は目の前で苦しむ人々の要請に応えようとして必死の思いで行った行為がついにはその人々にとっての救いにならなかった。自分の力で何とかなるのではないかという思い上がりが打ち砕かれたはずなのに、十七年もの時間を経てまたその思いが顔を出してくる、その愚かさが「人の執心、自力の心は、よくよく思慮あるべし（「恵信尼消息」聖典六一九頁）」という親鸞の言葉で表現されています。

恵信尼は〝あなたのお父さんはどこまでも人々の苦しみに寄り添っていかれた人であるとともに、念仏によって自らの無力さを知る凡夫として生きた人です〟と三十年以上も前の忘れがたいできごとを通して親鸞という人を娘に伝えようとしたのではないでしょうか。

凡夫の我を生きよ

親鸞最晩年には、正嘉の大地震そして数年にわたる文応の大飢饉に襲われ多くの人々が亡くなっていく中で、親鸞は関東の門弟方に長い手紙をしたためていますが、そこにも大切な言葉が示されています。現代語訳は次の通りです。

なによりも、去年・今年と、老少男女の多くの人々の死に遭いましたことこそ、寂しいことです。けれども、生死無常の道理は、すでに詳しく如来が説いておられることなのですから、改めて驚かれるには及びません。ともあれ、私、善信（親鸞）においては、臨終の善し悪しを問うことはしません。信心の定まった人は、阿弥陀仏の誓いを疑う心がないので、必ず往生する身と決まっています。だからこそ、愚かで、無智な人も、何の心配もなく臨終を迎えることができるのです。

（参照　聖典六〇三頁）

今、私たちはコロナウイルス感染拡大による目に見えない怖れや不安に覆われた世界を生きています。そのような状況の中で多くの人々が求めるのは今も昔も南無阿弥陀仏による救いではなく不安な状況の終息と解決法であり、仏教に対してもそのための祈りを要請します。それに対して仏教は私たちに生死無常を語りかけます。ありのままの現実を受け入れるところから生き始めよということでしょう。

この世は生死無常なるがゆえに、何かせずにはおれない。そして己れを尽くすことで自らの愚かさを知る凡夫の我を生きよ、と教えているのではないかと思います。

教務所からのお知らせ

――《住職任命》――

二〇二〇年八月二十八日付
近江第四組　立光寺　冨田　光
［敬称略］

――《敬弔》――

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

山城第二組　西福寺前坊守　川那邊初江
二〇二〇年八月二十五日　八十歳

丹波第一組　唯然寺坊守　松永アサノ
二〇二〇年八月二日　九十三歳

但馬組　常光組前坊守　鵜　御信
二〇二〇年八月二十七日　百歳
［敬称略］

――《東本願寺出版刊行物のお知らせ》――

『卓上　日めくりカレンダー　正信偈』
（寺院・教会割引対象）７０４円（税込）

「正信偈」に込められたおこころにふれる日めくりカレンダー。京都・東本願寺のお土産や記念品にも最適！東本願寺や渉成園の四季の写真とともに「正信偈」の言葉にふれるカレンダー。裏面に書き下し・意訳も収載。

※毎月掲載しております、「ことば」は、教区駐在教導が担当しています。

駐在日記

「自分自身が如来の教化を受けるということがそこにあるならば、何をしてもいいのでしょう。しかし、自分自身が如来の教化を受けるということがそこにないならば、何をしてもダメです」

▼これは、あるところで、若い人たちがこれから教化を担っていこうという時に、ある先生が言われた言葉。▼私自身、長年「教化」に携わり、「教化事業」を推し進めてきたが、この言葉には驚かされた。▼例えば子ども会等の青少幼年教化活動。ゲームをしたり思いっきり遊んだりするけれど、やはりそこにはお勤めや法話がある。大人が子どもに教えるのではなく、私が子どもたちと一緒に如来の教化を受けるという感覚を持ち続けることが大切であり、子ども会は「仏事」なのだ。▼例えば推進員養成講座。講師のお話をスタッフも受講者も共に聞くことを大切にするが、その後の座談会でスタッフが第２講義をしてはならない。スタッフも受講者も共に教化を受けるということにおいて、真宗の場が成り立つ。▼例えば法務。そこに勤行がある限り、それは私が教化を受ける場。私が法話をするとしても、仏法の話であるかぎり、法に私自身が教化されるということが真宗の基本なのだと思う。▼しかし、私の眼は外を向いていて、その基本を常に忘れる私がいる。忘れるけれども、先生の言葉は私に突き刺さっている。突き刺さったままなので、言葉は今も生きている。だから言葉と、いつでも出会うことができるのだ。

（駐在教導　谷本　修）

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌
「教区だより」 特別号 Vol.6
発行人 日野 隆文 （真宗大谷派京都教務所長）
発行所 真宗大谷派京都教務所
〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入
Tel：075（351）5260 Fax：075（351）5256
発行日 ２０２０ （令和２） 年１０月１日
メールアドレス：kyoto@higashihonganji.or.jp
真宗大谷派京都教区ホームページ
京都教務所 検索